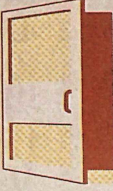


共生の扉



木のぬくもりがあふれるギャラリーに入ると、色鮮やかなアート作品が目飛び込んできた。鹿児島市皆与志町の障害者支援施設「あさひが丘」に併設されている「ぎゅらりーASAHIYA」。知的障害や自閉症のある18〜70歳の約100人が制作した陶芸、絵画、革製品など世界に一つない独創的な作品が広がる。



作品を手に、笑顔の利用者ら＝鹿児島市皆与志町のぎゅらりーASAHIYA

あなたも私も 皆が主役

ぎゅらりーASAHIYA (鹿児島市)

「自分自身を自由に表現することが心身の健康につながる。やりたい創作活動をやりたい時にしてもらっている」。日中活動支援課長の新澤杏奈さん(39)は説明する。地域の人たちに作品を見てもらおうと開設したギャラリーは今年8年目を迎える。ギャラリー以外にも課外活動の一環として、学校バザーやイベントに参加し作品を展示販売してきた。ところが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止が相次いだ。どうすればいいのか。まずは施設内での活動を充実させようとして昨年7

月、「アートデー」を設けた。皆と一緒に絵やタペストリーなどを作る時間だ。8月には鹿児島市のマルヤガーデンズに共同作品を展示し好評を博した。12月の「アートデー」では新年の干支(えと)「寅(とら)」と前年の「丑(うし)」をテーマにした。利用者の前田崇志さん(26)と柳園夏菜子さん(25)のデザインをもとに和紙や折り紙をちぎって貼ったり、竹や廃材を組み立てたりと試行錯誤。びよぶとしめ細も組み合わせた立体作品に仕上げた。完成した日。メンバーに集まってもら

い写真を撮った。わいわいがやがやとした雰囲気。舞台のようなセリフをつぶやく人、恥ずかしがって下を向く人、「新聞に出ると大喜びの人もある。支援員の本田和輝さん(29)が「カメラを見てね」と呼び掛けると、ほんの一瞬、気持ちが集まり笑顔が輝いた。「コロナが早く収束し多くの人にギャラリーに来てもらえるといい。扉はいつでも開いています」。新澤さんが代弁する。鹿児島に暮らす誰もが尊重し合い共生する、そんな新年となればいい。(文・速見由紀子、写真・有村美千代)



利用者が制作した
えこの作品



制作風景の動画はこちらから



南日本新聞 第2部 CONTENTS

コロナに負けない @かごしま	2/3
奄美・徳之島 冬もエンジョイ	5
屋久島 自然と暮らしの共存脈々	6
ミニチュア作品 日常飛び出そう	19